

《研究ノート》

## 近代期における神社の参道空間に関する地理学的研究

高橋 かおり・天野 太郎

### 1. はじめに —本研究の目的と先行研究の動向—

近代において、神社は「国家ノ宗祀」として位置づけられ、神道と仏教を分離する政策をとったことによって、神社の規模や景観は、時代の変遷とともに大きく変容することがあった。本殿や拝殿を含む神社建築は多様な形式を備えており、繰り返される遷宮や明治期の廃仏毀釈などによって境内の規模が変容するだけでなく、境内は地域社会とのかかわりと密接に結びつきながら変容しており、社殿の位置や向き、景観を含めた神社境内のありかたは必ずしも一定ではない。

境内の理想的な立地環境は、山内泰明によると北は高地で林を背にし、南側が開けている立地であることから、社殿が南面することが指摘<sup>1)</sup>されている。参道は、一般的には社寺に参拝する人のための道とされており、宗教的な儀礼をおこなうにあたっての役割を果たすこともあるなど、重要な空間である。また、地理的条件や歴史的な形成過程によって参道が複数存在していることも多い。

これまでも神社の参道を対象にした既往研究は多くなされている。参道の空間構造を分析したものとしては、船越徹らの研究<sup>2)</sup>があり、なかでも斎藤潮は参道の空間構成に着目することで社殿などの象徴的な対象について分析し、参道における意味論的視点を取り入れた定量的な研究<sup>3)</sup>を残している。小林章は、近代期における歴史的背景の影響を踏まえ神社境内の特徴と都市計画的な影響を指摘<sup>4)</sup>しており、岡村祐らによる現代都市空間における参道の特質とその形成過程に着目した研究<sup>5)</sup>も注目される。また、金沢成保・桶本孝における技術的な空間構成の演出だけでなく参道の役割について指摘した研究<sup>6)</sup>や、岡野眞の神社参道における空間システムの中にある日本の伝統的生活文化の影響と可能性について言及した研究<sup>7)</sup>も存在し、近代期における神社の景観や空間構造に関連して多角的な視点からの研究がなされている。

しかし、これらの研究は、明治神宮や宗像大社など対象地域が限定されており、東北地方なかでも本研究における宮城県塩竈市の塩竈神社に関する研究は管見の限り事例数が少ない。

こうした研究史を踏まえた上で、本研究では、塩竈神社(志波彦神社・塩竈神社)を研究対象としてまず①神社の境内や社殿を含めた景観が、近代における社会情勢の中でどのように変化したのか明らかにする。歴史的な景観がいつ形成されたのか、近代期における宗教空間のありかたとともに分析を行う。次に②参道の中軸とした空間構造がどのように変化したのか、その景観の変容に着眼点をおいて明らかにする。陸奥国において『延喜式』にその名が残る式内社として古代からの伝統を有する志波彦神社と、陸奥国の一宮神社として重要な格式を有する塩竈神社に参詣するための参道がどのように形成され、周辺地域とのかかわりをもってきたのか分析

を行う。具体的には、特に主要な参道である表坂および裏坂が、境内においてどのような意味をもってきたのか、さらには集落・港等との関係について明らかにすることを目的とする。

## 2. 志波彦神社・塩竈神社の形成過程

本研究で対象とする塩竈神社は、宮城県北部の太平洋沿岸に位置する塩竈市にある。塩竈は、近世期には貞山運河の北端に位置し、仙台北下まで運河で直接つながれるなど港湾集落として重要な位置を占め、また塩竈神社を中核とした門前町として発展してきた歴史を持つ。この塩竈とは、古代より海水を煮詰めて製塩する手法からその地名がつけられており、全国各地に展開している。そうした「塩竈」という名称を冠した塩竈神社は、この周辺地域の地理的特性と文化的背景をもとに形成されてきたものと考えられている。塩竈神社の門前町の一部には、御釜神社が遷座していることからわかるように、製塩業との関連が深く、港湾集落とともに発展してきた。さらに明治期には東北地方の産業開発のための拠点港として政策的に決定されたことにより、近代的な港湾都市としての変化がみられた。主な築港工事は明治15年から開始されて、現在の中心市街地にあたる JR 仙石線本塩釜駅周辺が埋め立てられ、その後も大正4年に貿易港として築港事業が進められ、現在みられるような国内・国際交易港の一つとして発展してきている<sup>8)</sup>。

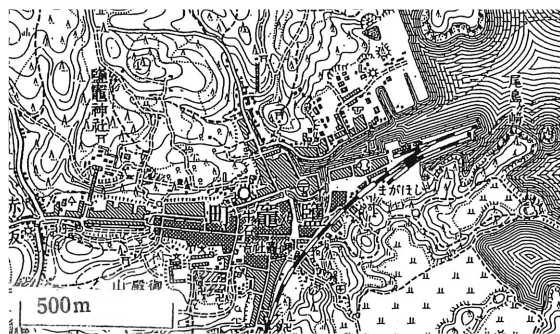
ここでは、塩竈神社の形成過程について論じていくが、現在塩竈神社は志波彦神社・塩竈神社と併記して称されており、二社が一体のものとして取り扱われている。なぜこのような形式となっているのか述べてみたい。

### 1) 塩竈神社と志波彦神社

港湾集落を見下ろすかたちで台地上に位置しているのが塩竈神社である。この塩竈神社の創建は古代にさかのぼるとされており、弘仁11年(820)に選進された『弘仁式』の『主税式』には破格の庇護を受けていた記録が残されている<sup>9)</sup>。また、明治期の神社合祀の際に、のちに詳述するように現在の仙台市にあった延喜式内明神大社志波彦神社が明治7年(1874)に遷祀してきたという歴史をもつ。

塩竈神社については、特にその宮司によって多くの先行研究が残されており、なかでも押木耿介<sup>10)</sup>は、祭神の歴史や特殊神事といった歴史的観点に言及するだけでなく、多賀城と塩竈神社を結ぶ古道に関する地理的観点からの幅広い業績を残している。

一方、塩竈神社に合祀された志波彦神社に関しては、天正年間(1573~1592)に縁起を焼失したことで残存する資料が乏しく、その祭神など神社にかかわる事柄に関して諸説あり、今後の研究を待たねばならない点も多い。また合祀される以前の旧境内地



出典：1912年測量 二万五千分一地形図「塩竈」(部分)

図1：研究対象地域

には、現在では別の神社が存在しており、かつての志波彦神社の歴史との関連性が希薄になっている<sup>11)</sup>。しかし、志波彦神社は現在の塩竈神社の空間構造や景観を考察する上では、重要な存在である。

## 2) 志波彦神社合祀以降の境内空間

近代期において神道を取り巻く政治的・宗教的な環境は大きく変動し、廃仏毀釈にみられるように、その影響は単に宗教的な中核である寺社境内のみならず、周辺地域にも大きな影響を与えた。その一つである合祀政策は、明治39年(1906)以降から本格的に実施され、大正5年(1916)ころに終息を迎えた。しかし、神社整理の大綱は政府の手によって決定されたものではあるが、実施上の権限は各府県の知事に委ねられたため、府県によっては具体的な内規を設け、一町村一社を理想に掲げて実現を試みた地域のある一方、消極的な地域もあり、また合祀反対運動にも地域間格差が存在した<sup>12)</sup>。

明治4年に国幣中社に列格された志波彦神社は現在の場所とは異なり、元の鎮座地は宮城郡岩切村冠川(現在の仙台市七北田川)にあった。当時の氏子戸数が269戸、神社の境内は3,500余坪であった。近代期以降は、この志波彦神社が拡張する敷地的な余地がなく、展開に制約があったため、翌年明治5年に宮城県から教部省に対して官社に適した社殿を新建するか、あるいは地域の中心的な存在であった塩竈神社に遷祀合併するかいずれを選択するか伺いが立てられた<sup>13)</sup>。志波彦神社塩竈神社社務所に収められている『塩竈神社史料』には、次のような記述がみられる<sup>14)</sup>。

鹽竈神社は祭神も本社と御同神なるを以て、御撰座迄にも及ばせられず、直ちに鹽竈神社へ本社の名稱を移し奉りて祭事を執行し、(中略)志波彦神靈を鹽竈社鹽土翁の神殿に合せ祭り、(中略)四柱の神名を以て祭典執行せば、兩神に對し不敬なることなし

この記述にみられるように、塩竈神社へ志波彦神社を移して祭祀を執行し、現在の神社を志波彦神社の旧地旧社として新たに社殿を造営することで国幣社に指定された趣旨を満たすとして県に申し出て、県から教部省に申達することで検討を求めた。その後、国幣中社志波彦神社を、塩竈神社の別宮本殿内に奉遷することになり、これに伴って塩竈神社も国幣中社に列格された<sup>15)</sup>。

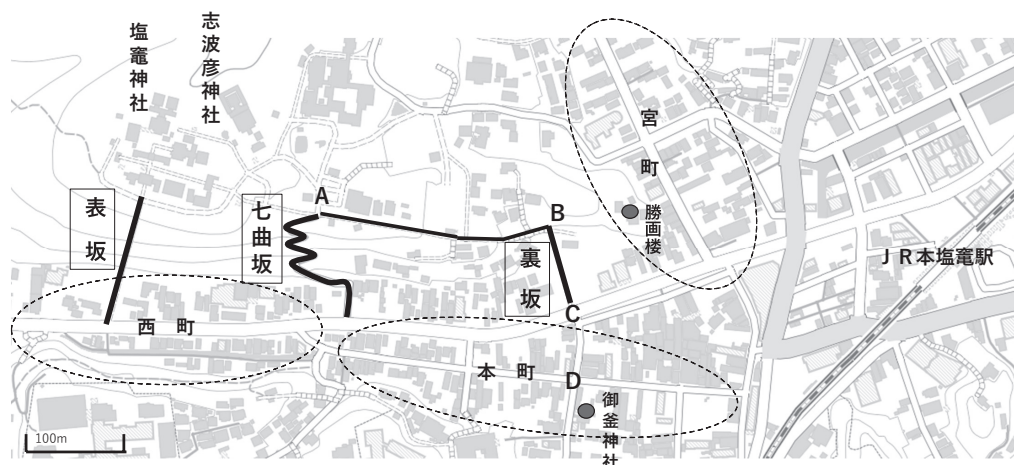
こうしてみてきたように、現在の塩竈神社は、正式には「志波彦神社塩竈神社」と呼称されており、二社は一体のものとして位置づけられている。現在も境内空間は連続性をもって繋がっており、一つの宗教空間を形成しているが、このような空間が創出されたのは明治期以降のことであり、その歴史的な経緯と反し、近代的な景観であることが指摘できる。

次に、境内の景観のなかで社務所に関してその変化について考えてみる。塩竈神社の社務所は、明治22年に境内地の新たな場所に建設されたが、その後老朽化したため、12代宮司であった佐藤重三郎が、新たな社務所を建築することとなった<sup>16)</sup>。これが現在みることが出来る塩竈神社の社務所であり、旧社務所の跡地には志波彦神社の社殿が竣工され、昭和13年(1938)に現

在の志波彦神社・塩竈神社の境内の景観が成立した。すなわち、先に述べたように現在のこの神社の景観が明治以降であることを指摘してきたが、伝統＝歴史というイメージとは反し、昭和に成立した景観であることは、伝統とは何か、歴史的な景観とは何か、あるいは現在歴史的な文化財保護などで議論されるオーセンティシティの問題とも相まって、私たちが一般的に伝統的だと感じているものが決して古くはなく、とりわけ近代という歴史的な転換期において、特に政治的な背景から創出されてきた点は、重要であると考えられる。

### 3. 塩竈神社における参道空間

神社に参拝する参道は、大別して境内のなかに存在する境内参道、集落と神社を結ぶ境外の参道の二つが存在する。なかでも後者の境外の参道は、人々が神社に参詣を行う上で重要であり、街道とのかかわりや水上交通とも繋がりを有することが多い。さらには、参道を軸として自然発生的に門前町を形成することがあり、宗教と都市集落とのかかわりやその空間構造を説明することは、歴史学や都市計画史のなかでもこれまで論じられてきた。なかでも門前町と対比される寺内町などについては、西川幸治の研究<sup>17)</sup>にみられるように、日本の都市史自体を考



出典：地理院地図を基に筆者作成。

図2：塩竈市街地と志波彦神社・塩竈神社への参道の位置関係



2021年8月21日 筆者撮影

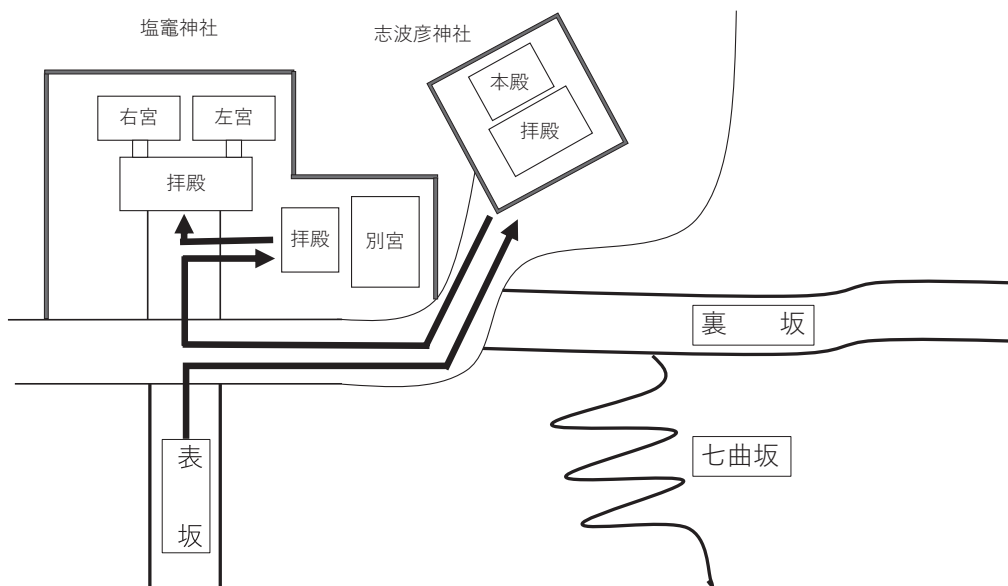
写真1：塩竈神社の2つの参道 (左)表坂 (右)裏坂

察する上で重要な意味をもつ。ここではまず集落と境内とを結ぶ参道に注目してみたい。

塩竈神社の参拝にあたっては、参道は複数あり、歴史的なものとしては、表坂・裏坂・七曲坂の三つが存在する。図2は塩竈市街地と志波彦神社・塩竈神社への参道の位置関係を示したものであり、図1ならびに現地の写真1をみてもわかるようにその傾斜は大きく異なる。最も西側に位置している表坂は、塩竈神社の本殿・拝殿の軸のほぼ延長線上にあり、その「表」の名称のとおり、塩竈神社への表参道としての位置づけがなされている。中間に位置する七曲坂は、急傾斜地に位置しているがその名称のとおり、屈曲した参道となっており、徒歩で上りやすい工夫がなされている。この参道が最も古い参道であると位置づけている研究<sup>18)</sup>も存在する。最も東側に位置しているのが裏坂であり、現在最寄り駅の本塩釜駅からアクセスする際には最も近い参道である。図2と写真からもわかるように、傾斜もゆるく三つのなかでは最も上りやすい参道となっているがその名は「裏」と表記されている。

### 1) 参拝順路

近代の神社合祀による志波彦神社の建立以降の一般的な参拝順路は、志波彦神社を最初に参拝し、そののちに塩竈神社の別宮、さらには左右宮の拝殿へ向かう参拝順路とされている。また宮司であった押木耿介は、参拝にあたって先に述べた202段ある表坂から登拝することが正式である<sup>19)</sup>としている。押木の指摘するように表坂から参拝すると、志波彦神社へ最初に参拝するためには東側へいったん進み、参拝したのち同じ参拝路を戻り塩竈神社に戻ることになる。なぜこのような参拝順路になっているのか、各参道に着目していきたい。



塩竈神社由緒書パンフレットを基に筆者作成。

図3：塩竈神社の境内模式図

## 2) 表坂—表参道—

まず、表坂はその名の通り志波彦神社・塩竈神社に参拝する際の表玄関に相当する入口となっている。表坂の石段の登り口にある鳥居は、寛文年間(1661~1673)に建立された石鳥居であり、信仰の深かった仙台藩四代藩主伊達綱村による社殿造営にあわせて表坂の整備が行われた。この寛文年間に整備された表坂の石段は182段あり、石鳥居から石段を上った正面に塩竈神社の社殿が建てられている。

この急な勾配の表坂の両側には、明治29年に地元有志の要望がだされ手すりが設置された<sup>20)</sup>。表坂には石鳥居も設置され、年3回の「氏子祭り」の際の大神輿の渡御ルートに相当するなど、正式な順路としての位置づけがなされているが、参拝者が表坂から登拝することは体力を要したものと考えられる。そして、表坂から上ったのちに、東側にいったん曲がる順路をとる。これは、先述したように昭和13年に志波彦神社が現在地に遷座したのちにこのルートが確立したものであり、一見すると塩竈神社に戻るルートになっているが、伝統的なありかたではなく、新しく生みだされたルートであることにも注目できる。

一方、裏坂から志波彦神社・塩竈神社にいたる参道に注目してみよう。この参道は裏参道あるいは東参道とも呼ばれ、宮町・門前町から通じる参道であり、勾配がゆるいことから通称「女坂」とも呼ばれている。この裏坂はかつて当地に存在した法蓮寺の支坊が道の両側に並び建っていた道である<sup>21)</sup>。法蓮寺は中世以来の真言宗の寺院で、江戸時代には塩竈神社の別当寺として支配を強め、神仏習合の方式で行事が行われていた。しかし明治期の廃仏毀釈の影響で現在では廃寺となり、この裏坂の両側には現在も空閑地となっている場所も観察することができる。わずかに残った礎石や石灯籠に往時を偲ぶことができる。

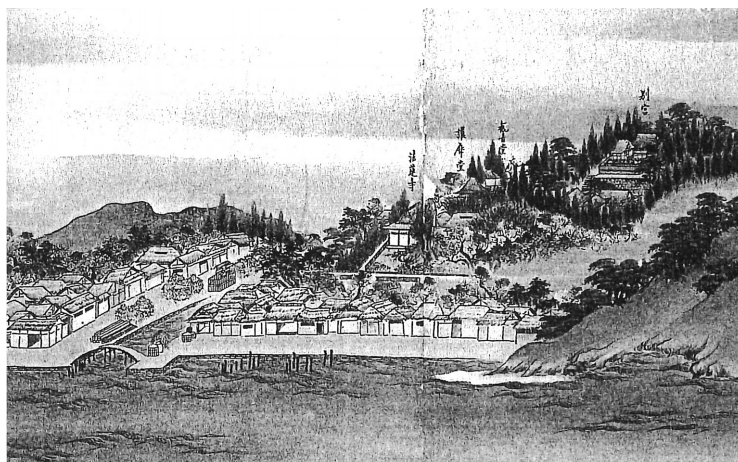
## 3) 表坂と対置される裏坂—裏参道の意味—

この裏坂は、表参道としての表坂とは異なり「裏」と称されているが、実際には参道としてのどのような役割を果たしてきたのかについてみていきたい。傾斜は緩やかで参拝にも適しているようにみえるこの参道がなぜ「裏」であったのだろうか。

明治9年に行われた東奥巡行にあたり、天皇は松島を観覧した後塩竈に立ち寄った。その際主要な移動手段として使われたのは船であり、港湾集落を経由して塩竈神社に参詣する上での利便性が高かったものと考えられる。上陸後は裏坂の麓に存在した法蓮寺の勝画楼を行在所とし、裏坂を経由して別宮・左右宮を参拝し、再び行在所前から馬車に乗って塩竈を出発したことが記録に残されている<sup>22)</sup>。さらに昭和5年(1930)に行われた東北産業博覧会に参列した閑院宮殿下が塩竈神社を訪れた際にも、この裏坂から別宮・左右宮を参拝した<sup>23)</sup>記録が残されている。

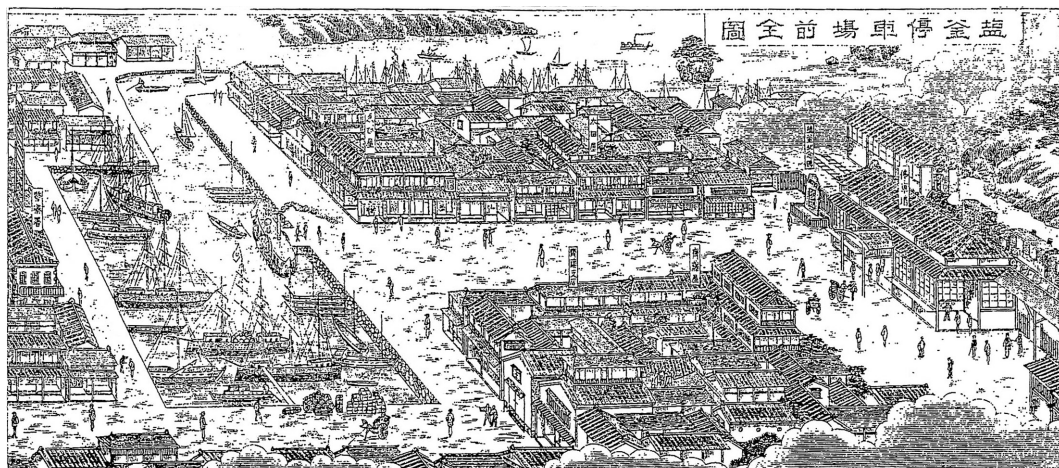
こうしてみてきたように、明治以降の皇族の参拝の際にも、主として裏坂が利用されていることが明らかとなり、近代期における皇室と神道とのかかわりを勘案すると重要な点であることが指摘できる。「表坂」に対して「裏坂」という名称が使われてはいるものの、この裏坂からの参道が、塩竈神社参詣に際して大きな役割を果たしてきたと考えられる。

つぎに塩竈神社と周辺の集落との空間構造に着目して考察すると、近世以前の当地の主要な



出典：佐久間洞巖筆「塩竈浦上回顧図」(部分)『鹽竈富山図』、塩竈神社博物館所蔵

図4：近世の塩竈の集落の景観



出典：水間豊稲編『国幣中社塩竈神社明細全図』、1881年出版

図5：明治期の塩竈の港湾の景観

交通路は水運であり、塩竈の津は大きな意味を有していた。

図4のように、近世の絵図や名所案内記にもこの津を経由しての参拝のありかたが描出されており、水運の拠点と塩竈神社とが密接なつながりを持っていることが読み取れる。

さらに図2から位置関係を検討すると、現在のJR本塩釜駅周辺がかつての近世期の津が比定できるが、そこから本町へとつながる道沿いに両側町として集落が展開している。その中央部には享保9年(1724)創業の「浦霞」で知られ、塩竈神社の御神酒屋でもある佐浦酒造の酒蔵があり、伝統的な街並みが現在も残っている。またこの本町には、先述した製塩業とゆかりの深い御釜神社が存在する。この神社は塩竈神社の末社ともされ、大祭である藻塩焼行事(県指定無形民俗文化財)はこの場所で行われている。塩竈神社にいたる途中に位置しているため、かつては塩竈を訪れる観光客は必ず立ち寄る場所になっていた<sup>24)</sup>という。港から本町にいたる通りから裏坂に向かって直交して北に向うと裏坂に至り、現在でもかつての旅籠屋が存在する

景観を有しており、参拝者の動線としてスムーズな参道を形成していることが指摘できる。

また、図5は近代における塩竈の港湾の景観を写したものである。近代交通体系の発展とともに、図中右側には停車場(旧塩竈駅)が見え、鉄道と水運との結節点としてこの場所が機能していたことがよみとれる。

さらに、明治41年からは裏坂参道の拡張工事が行われ、改修工事記念碑も現存している。そこには、表坂と七曲坂は険しく距離があるのに対し裏坂の便宜がよいことから文政天保の頃に裏坂を整備したところ参拝者の利用が多かったことが記されており、実際には多くの参拝者が近世期よりこのルートを利用し参詣していたことが指摘できる。また明治19年の鉄道開通以降、旧塩竈駅が本町の東側に位置して建設されており、近世期までの水運を中心とした参拝時にも、さらには近代交通体系のなかでも、この裏坂を利用した参道の利用が実質的には「表参道」としての役割を有していたことがわかる。

#### 4. おわりに

本研究では、宮城県塩竈市の塩竈神社(志波彦神社・塩竈神社)を対象として、神社の境内や社殿を含めた景観が、社会情勢の中でどのように変化したのか、参道を中軸とした空間構造がどのように変化したのかという点について考察を行ってきた。3つの参道—実質的には古道とされる七曲坂を除く2つの参道—の近世—近代の在り方について概観してきたが、急勾配の階段を持つ表坂が表参道としてさまざまな儀礼的・宗教的な意義を有して表参道とされてきているにも関わらず、一方では緩傾斜で参拝しやすく、周辺集落・港との関係からもアクセスが良好であり、さまざまな観点から実質的には「表」としての役割を有してきている裏坂が「裏参道」とされてきたことを概観してきた。実際には多くの参拝者や皇室関係者も利用した参道がなぜ「裏」と称されて位置づけられてきたのだろうか。志波彦神社・塩竈神社の参拝順路を考えるとむしろこの裏坂を経由する裏参道がスムーズな経路となるが、志波彦神社が合祀され社殿が現在の景観となった昭和以降は、自動車交通の一般化によって参拝可能な道路も新設され、そのルートでの参拝が現在では一般的となっている。また裏坂は、かつての法蓮寺境内を縦貫する道にあたり、塩竈神社という宗教空間に至る参道としての位置づけが宗教的には相対的に低くなり、左右宮の拝殿・本殿へと直線的に結ばれる表坂—表参道が優位なものとして位置づけられてきたものとも考えることができる。

参道が日常空間から非日常空間へと遷移するための空間的な「装置」であることをも勘案すると、実質的な主参道であった裏坂—裏参道が、形式的には裏とされてきたこともこの地の空間構造を考察する上で興味深い。「表」・「裏」という名称と、周辺とを結ぶ参道との関係性を考えてきたが、表坂経由の参拝順路の複雑性、裏坂が実質的に中心的な役割を有しており、かつ神道と皇室とのかかわりを勘案しても裏坂を利用しているにもかかわらず「裏」と称され続けてきたことも、志波彦神社の合祀、廃仏毀釈後の法蓮寺の衰微という近代以降の景観の変化と深いかかわりが存在することが指摘できる。

参拝順序は、現代において正式な順路としているものが必ずしも古来より続くような伝統的なものではなく、近代の国家神道における神社合祀政策の影響や、市街地での鉄道や街道・港



湾などの建設による影響が反映されるものであることが明らかとなった。また同時にそのような変化を経ながらも、神社が正式としている参拝順路は、既述のように近代期における港湾の発達や鉄道の開設などの影響により、市街地の中心街路、すなわち本町を貫く街路から北へ直角に曲がるルートの主参道の役割を果たしてきたにもかかわらず、本殿・拝殿からの位置関係により「表坂」からのルートが正式とされてきたことを明らかにした。

塩竈神社のような山の上にある神社を仰ぎ見るという行為の神聖性は、近代期に造営された植民地の北海道の神社など、近代の神社・神道の社会的位置づけの変化とともに広く見られるが<sup>25)</sup>、人々が暮らしている空間と隔絶された場所に本殿・拝殿があるという宗教空間の創出が重要視されていることを鑑みると、表坂から本殿・拝殿へと直線的に伸びる参道のかたちには宗教的な意義が込められているのではないかと考えられる。

「伝統」として私たちが受容しているものの本質とは何か。本研究では伝統という観点と、宗教上から連続性が高いイメージが抱かれる神社という空間に焦点を当てて論じてきたが、可視的に伝統的・歴史的とされているものや、精神的にしきたり・礼儀作法として継承されたものの中にも、近代の転換期に景観の変容を受け、あるいは新たに創出されたものが数多く存在する。その非連続性があらたに創出される背景についてはさらに他の伝統行事や祭礼、茶道や華道をはじめとした儀式にも焦点を当てて論じる必要があるが、残された地域研究や伝統的とされ礼儀作法に関する研究の課題として別稿に期したい。

## 注

- 1) 山内泰明『神社建築36-7』近代建築社、1982年、205頁。
- 2) 船越徹・積田洋・清水美佐子「参道空間の文節と空間構成要素の分析(分節点分析・物理量分析)―参道空間の研究(その1)―」日本建築学会計画系論文報告集384、1988年
- 3) 斎藤潮「神社参道の空間構成に関する研究」都市計画論集24、1989年、457-462頁。
- 4) 小林章「近代の神社境内の研究動向」東京農大農学集報61-4、2017年、126-136頁。
- 5) 岡本祐・北村猛・西村幸夫「境外参道の空間特性に関する研究―東京都心部をケーススタディとして―」日本都市計画学会 都市計画論文集40-3、2005年
- 6) 金沢成保・桶本孝「神社参道の意味と空間構成―佐賀を中心とした事例研究―」低平地研究 8、1999年
- 7) 岡野眞「神社の参道空間―日本の空間システム序説―」社叢学研究 6、NPO 法人社叢学会、2008年、91-78頁。
- 8) 『日本歴史地名大系第四巻 宮城県の地名』平凡社、1987年、360頁。
- 9) 押木耿介『鹽竈神社 学生社 日本の神社シリーズ』学生社、2019年、63頁。
- 10) 前掲注9)102-103頁。
- 11) 附記。明治10年3月21日官の許可を得て、志波神社分霊を宮城郡岩切村の旧址に選し祀り、之を冠川神社と号し、国幣中社志波彦神社・鹽竈神社の撰社に列せられたるも、如何なる次第なるか、冠川神社の社号消え、今は郷社八坂神社(中略)となりて、志波彦神社は其の傍の小祠に境内末社とし祀られ居る現状なれり。山下三次『塩竈神社史料』志波彦神社・塩竈神社社務所、1927年、57頁。
- 12) ①土岐昌訓『神社史の研究』桜楓社、1991年、293頁。②藪田稔、橋本政宜『神道史大辞典』吉川弘文館、2004年
- 13) 押木耿介『歴代宮司列伝 一森山叢書第三編 上』志波彦神社鹽竈神社社務所、1994年、7-8頁。
- 14) 前掲注11)46-47頁。
- 15) 明治初年から明治政府は神祇官を再興するなど意欲的な神祇行政を展開し、神社に関する重要事項を制度として確立していった。その中に社格という神社に対する公的な待遇上の等級などが含まれており、これに

は明治時代以前の制と、明治時代以後の制が存在する。全国的な社格制度の確立を図るため、明治4年(1871)に新たな社格制度が定められることとなった。伊勢の神宮においては特別のものとして社格は付けず、官社と諸社(俗にいう民社)の二種に大別された。そしてなお、国家的待遇を受けた官社は官幣社と国幣社に分けられ、ともに神祇官の管轄下に置き、各大・中・小社の三等に区分した。官幣社と国幣社の区別においては、『延喜式』の制では神祇官が奉幣するか国司が奉幣するかという違いによったが、明治の新制においてはおのおのその例祭にあたって、前者には皇室から幣帛(神道の祭祀において神に奉獻する神饌以外の供物のこと)が、後者には国庫から幣帛が奉られるという点にあった。しかし、昭和22年(1947)にはこの社格制度は廃止されることとなった(前掲注12②)。

- 16) 押木耿介『歴代宮司列伝 一森山叢書第三編 下』志波彦神社鹽竈神社社務所, 1994年, 63-67頁。
- 17) 西川幸治『日本都市史研究』日本放送出版協会, 1972年
- 18) 斎藤善之「鹽竈神社の門前町 塩竈」地図情報28-4, 地図情報センター, 2009年, 27-30頁。
- 19) 前掲注9)185頁。
- 20) 町内有志が発起人となり鉄手摺設立願が提出され、当時在任中であった五代宮司中山宗禮は参拝者の便宜を計ってこれを許可した(前掲注13)。要した費用のことを考慮すると通常階段の中央に設立すると考えられるも、特殊神事としての神輿渡御の際にこの参道を利用することから中央ではなく両側へ設立したことが窺われる。
- 21) 前掲注9)103頁。
- 22) 「午前六時、侍従番長高崎正風を勅使として國幣中社志波彦神社・鹽竈神社に遣はし、幣帛・神饌を供せしたまひ、尋いで御出門、肩輿に御して同神社裏参道を社前に進ませらる、表参道は石磴峻層するを以てなり、社前にて下御、宮司落合直亮等を前導として別宮・左右宮に一揖あらせられ、…再び肩輿に御して後門を出で、行在所前にて馬車に御し鹽竈を發したまふ」『塩竈市史4別編2』塩竈市, 1986年, 686頁。
- 23) 前掲注16) 4-5 頁。
- 24) 『塩竈市史1本編1』塩竈市, 1955年, 376頁。
- 25) 天野太郎「近代植民地都市釜山の形成と日本系宗教施設」地域と環境4, 2002年

(鹽竈神社参道)

地理院地図 Vector | 国土地理院 (gsi.go.jp)

<https://maps.gsi.go.jp/vector/#16/38.318237/141.017515/&ls=vpale&disp=1>